

『クナーラ物語』への補注⁽¹⁾

神 山 重 彦

継母の邪恋

クナーラ太子の物語は、継子物語の一種である。継子物語というと、誰でもまず『シンデレラ』や『白雪姫』などを思い浮かべるであろう。これらは継子が娘であり、継母が娘をいじめるという展開をする。これに対してクナーラ太子の物語のばあいは、継子が男であり、継母がこの継子に恋心を抱く、というところに特色がある。とはいえ、これも古くからしばしば見られる物語である。

日本の物語で、『源氏物語』以前に成立した長編物語に、『うつほ物語』と『落窪物語』がある。このうち『落窪物語』は継子が娘で、継母がこの継子をいじめめるシンデレラ型の物語であることはよく知られている。これに対して『うつほ物語』は、全体は琴の名手の一族四代の歴史を語る物語であるが、その中の重要な挿話として「忠こそ」の巻に、クナーラ太子と同様の、継母が継息子を恋する物語がでてくる⁽²⁾。

『うつほ物語』「忠こそ」 五十余歳の未亡人・一条北の方は、三十歳過ぎの橘千蔭を愛人とするが、橘千蔭の訪れは絶え絶えのまま、数年が過ぎる。一条北の方は、橘千蔭の息子、十三～十四歳になる継子の忠こそその美貌に心を動かし、恋をしかける。忠こそがこれを拒絶したので、怒った北の方は、橘千蔭の持つ先祖伝来の石帯を盗み、博徒にそれを売らせて、罪を忠こそに着せる。しかし橘千蔭は息子忠こそを咎めず、北の方のたくらみは不発に終わる。その後、北の方のさらなる讒言によって橘千蔭は忠こそを疑い、忠こそは悲嘆して家を出、剃髪する。

時代は下るが、近世初期の説経『愛護の若』も、ほぼ同様の物語である。

『愛護の若』(説経) 二条藏人清平の後妻雲居の前が、継息子愛護の若を恋慕して艶書を繰り返し送る。愛護の若は「父清平に訴える」と言ってこれを拒絶したので、雲居の前は怒る。雲居の前の侍女月小夜が家宝の太刀・唐鞍を盗み、その夫がこれを町中で売って、罪を愛護の若に着せる。清平は立腹し、愛護の若を縛って桜の古木に吊り下げ

る。愛護の若は家を出、絶望して滝に投身する。

こういう物語は、外国にも古くから存する。

『ギリシア神話』(アポドロス) 摘要第1章 テセウスの後妻パイドラは、継息子のヒッポリュトスを恋し情交を迫るが、ヒッポリュトスはこれをしりぞける。パイドラはこのことをテセウスに知られるのを恐れ、自ら衣を引き裂いてヒッポリュトスに暴行された、と訴える(*エウリピデス『ヒッポリュトス』・ラシーヌ『フェードル』は、ともにこの伝説にもとづいた戯曲)。

『黄金のろば』(アプレイウス) 卷10 女が、継息子に恋情を抱いて密会を迫るが、継息子は口実をもうけて逃げる。女は怒り、医者から劇薬を手に入れて、継息子を毒殺しようとしたらむ。ところが、女の実子である少年が誤ってその薬を飲み、死んでしまう。女は「継息子が私の子を毒殺した」と訴え出る。実は、少年は仮死状態になっているだけであり、法廷に現れた医者が、女の悪だくみを暴く。

『王書』(フィルドゥスィー)「スイヤーウシュの巻」 カーウース王の妃スーダーベが、継息子スイヤーウシュを恋慕する。スイヤーウシュが彼女の求愛を拒否すると、スーダーベは、「スイヤーウシュが私を抱こうとした」と、カーウース王に訴える。王は二人の身体のおいをかぐ。スーダーベの身体からは、酒・麝香・バラ水の香りがする。一方、スイヤーウシュの身体には、そのような香りはまったくなかった。王は、スーダーベの言葉が嘘であることを知る。

『七賢人物話』 ポンティアヌス皇帝の妃が、継息子にあたる王子に言い寄って拒絶されたため、「王子が私を襲おうとした」と皇帝に讒訴する。妃は毎日いろいろな物語を皇帝に語り、王子処刑を促すが、それに対抗して、王子の教育係の七賢人が、一日一話ずつ物語をして、皇帝に処刑執行を思いとどまらせる。処刑は七日に渡って延期され、その間無言だった王子は、八日目に口を開き、妃の嘘を暴露する。

近代でも、次のような例がある。

『楡の木陰の欲望』(オニール) 七十五歳の農場主イフレイムが、三十五歳のアビーを後妻として連れ帰る。財産目当てで結婚したアビーは、イフレイムの三男、彼女にとっては継息子に当たる二十五歳のエビンを誘惑して、身ごもる。老イフレイムは、生まれた子を自分の胤と信じて、農場の相続人にする。

こういう物語の伝統をふまえつつ、別の工夫をして作られた物語がある。継息子への恋情なして、継母が継息子をおとしいれるというものがある。

『今昔物語集』巻9-20 継子伯奇をおとしいれるべく、継母が懐に蜂を入れておき、「蜂にさされた」と言って倒れる。そして伯奇に蜂を取らせ、そのさまを父に遠望させる。父は、倒れた継母の懐に伯奇が手を入れるのを見て、「伯奇が継母を犯している」と思い込む。伯奇は父親から疑われたので、家を出て河に投身する。

『本朝二十不孝』（井原西鶴）巻4-3「木陰の袖口」では、逆に、継子が継母をおとしいれる形にしている。

『本朝二十不孝』巻4-3「木陰の袖口」 親不孝の万太郎が、継母から日頃の悪行を注意されたことを逆恨みし、継母に難くせをつけて追い出そうとたくらむ。万太郎は父親に、「継母から言い寄られた」と訴える。次いで継母に「背中に虫が入って痛いので、取って下さい」と頼み、継母が万太郎の袖口から手を入れて探るありさまを、離れた所にいる父親に見せる。父親は「万太郎の言うのは本当だった」と思う。

歌舞伎や文楽で上演される『摂州合邦辻』では、継母の邪恋のように見えたのは、実は継母の演技だった、という意外な展開をする。

『摂州合邦辻』『合邦内』 家督争いのために、俊徳丸の命が狙われる。継母の玉手御前は俊徳丸を救うために、彼に偽りの恋をしかけ毒酒を飲ませて、癩病にさせる。病人であれば家督は継げず、したがって俊徳丸の身も安全だからである。玉手御前は父親を怒らせてその刃にわざと刺され、血を流して死ぬ。寅の年・寅の月・寅の日・寅の刻に誕生した玉手御前の血を用いれば、俊徳丸の癩病は治るのである。

しかしこれには、玉手御前は本心では俊徳丸を愛していたのだ、という解釈もある。現在、歌舞伎や文楽で上演される場合には、そういう解釈で演ずるのが普通であるという。継息子への恋とみせて、実はそれは演技、しかし心の底ではやはり継息子への恋情があった、という複雑な構造になっている。

ところで「俊徳丸」と似た名前の「しんとく丸」という人物が登場する作品がある。先に記した『愛護の若』と同じ、説経のジャンルに属する『しんとく丸』である。ここでは継息子への邪恋はなく、継母が、自分の実子を跡継ぎにしたいと望むことから、継息子を迫害・追放する。

『しんとく丸』(説経) 信吉長者の後妻は、「自分が産んだ子を嫡子にしたい」と望み、継息子しんとく丸を呪って、清水寺の生木や諸神社の格子などに合計百三十六本の釘を打つ。しんとく丸は両眼がつぶれ、癩病者となる。後妻は夫信吉長者に「しんとく丸を追い出すか、私を離縁するか」と迫り、信吉長者はしんとく丸を天王寺に捨てる。

継息子への迫害

継息子への邪恋なしで迫害・追放が行なわれる、ということならば、古代インドの大叙事詩『ラーマーヤナ』に似てくる。クナーラ太子の物語から、継母の邪恋の要素を抜き去ると、『ラーマーヤナ』に近づいてくるのである。

『ラーマーヤナ』 コーサラ国アヨーディヤーの都を治めるダシャラタ王が、子を請う馬祠祭を行ない、四人の王子を得た。まずカウサリヤー妃から長子ラーマ、次いでカイケーイー妃からバラタ、スミトラー妃から双子のラクシュマナとシャトルグナが誕生した。長子ラーマが父王の後を継ぐのが順当であったが、カイケーイー妃は、自分の産んだバラタを王にしたいと望んだ。かつてダシャラタ王は、傷ついた身をカイケーイー妃に救われた時、「二つの望みを叶えよう」と約束したことがあった。それゆえにカイケーイー妃は、自分の実子バラタの即位と継息子ラーマの追放を、ダシャラタ王に要求する。約束ゆえ、ダシャラタ王はその望みを叶えねばならなくなる。

これは、クナーラ太子の物語における、妃ティシュヤラクシャーがアショーカ王の病気を治したため、彼女の望みにしたがってアショーカ王は七日間の王権を与えた、という展開と類似する。

継母が継息子への恋情なしに迫害するという点に着目すると、日本の『源氏物語』とも通ずるところがあることに気づく。光源氏も、クナーラ太子やラーマ王子と同様に、王の息子である。王には多くの妃がいるから、光源氏も何人かの継母を持つことになる。その中で、光源氏に強い敵意を抱いていたのが弘徽殿女御である。

『源氏物語』 弘徽殿女御は桐壺帝の第一皇子を産む。ところが桐壺帝は、弘徽殿女御よりも身分の劣る更衣を寵愛し、更衣は第二皇子光源氏を産んだ。第二皇子光源氏は才能も容貌も、第一皇子よりもまさっていたため、弘徽殿女御は、彼女の実子第一皇子をさしおいて、継息子にあたる光源氏が皇太子になるのではないかと恐れる。幸いにして第一皇子が皇太子となり、やがて即位して帝(朱雀帝)になったので、弘徽殿女御は安堵する。しかし光源氏の成長後に、また新たな問題が起こってくる。弘徽殿女御は自分の妹である朧月夜を、朱雀帝の妃にするつもりであったが、光源氏が朧月夜と関係を持ってしまう。そのことを知った弘徽殿女御は怒り、光源氏の官位剥奪、流罪などを行

なおうとする。それを避けるため、光源氏は二十六歳の春三月から二十八歳の秋七月まで、自ら京を退去し、須磨・明石に身をひそめる。

ダシャラタ王が桐壺帝、カイケーイー妃が弘徽殿女御、ラーマが光源氏、バラタが朱雀帝にあたるわけである。もちろん違いもいろいろあって、ダシャラタ王がラーマ追放を悲しんで死ぬのに対し、桐壺帝は、光源氏追放以前にすでに病死している。ラーマが長男、バラタがその弟であるのに対し、『源氏物語』においては朱雀帝が兄、光源氏が弟である。

貴種流離譚

もう一つ、『源氏物語』と『ラーマーヤナ』では異なるところがある。光源氏は、彼の最愛の女性・紫の上を京に残して須磨へ赴く。それに対して『ラーマーヤナ』では、ラーマは妻シータとともに都を出て、森へ行くのである。

一般に物語の主人公は、家庭的には恵まれないことが多く、赤ん坊の時に捨てられるという話が古代からよく見られる。西洋の古代には、この種の物語がしばしばあらわれる。

『英雄伝』(プルタルコス)「ロムルス」 ヌミトルとアムリウスの兄弟がいた。アムリウスはヌミトルから王位を奪い、ヌミトルの娘イリア〔*娘の名は「レア」とも「シルウィア」とも言う〕が子供を産んで将来の脅威とならぬよう、彼女を女神ウエスタの巫女にした。しかしイリアは、軍神マルスによって双子ロムルスとレムスを産んだ〔*アムリウスがイリアを犯した、とも言う〕。アムリウスは召使に命じて、双子を捨てさせた。

『サルゴン伝説』(アッカド) 「私(アッカド王サルゴン)」の母は女神官エニトウで、父はわからない。母はひそかに「私」を産み、藪の籠に入れて川に流した。灌漑人アッキが「私」を拾い育て、園丁にした。「私」は園丁時代、女神イシュタルに愛された。「私」は五十四年間王国を支配した。

『出エジプト記』第1～2章 ヘブライの女が男児を産んだらすべてナイル川に投げこめ、とエジプトのファラオ(パロ)が命ずる。一人の女が、産んだ男児を殺すことができず、籠に入れてナイル河畔の葦の茂みに置く。男児はファラオの王女に拾われ、モーセ(モーゼ)と名づけられる。

『オイディプス王』(ソポクレス) テーバイのライオス王は、「自分の息子に殺され

る」との神託を得ていた。それで王は、生まれた息子の両足のくるぶしを留め金で刺し貫いて、キタイロンの山奥に捨てた。その子は羊飼いに拾われ、コリントス王に育てられて、「オイディプス（＝腫れた足）」と呼ばれた。

もちろん日本にも、こういう子捨ての話はあるのだが、それとは別に、高貴な生まれの人物が青年期に達してから親もとを離れ、辺境をさすらって苦勞する、という物語群がある。かつて折口信夫がそうした類型のあることを指摘して、これを「貴種流離譚」と名づけた。

『伊勢物語』第9～15段 昔ある男が、京を住み憂く思い、友人一～二人とともに東国へ旅に出た。男は三河の八橋で咲き誇る杜若を見、駿河の宇津の山で旧知の修行者に出会い、真夏に雪をいただく富士山に驚き、とうとう武蔵・下総の境の隅田川に到った。その後、男はさらに陸奥にまで脚を伸ばした。

『義経記』 源義経は、平家追討後、兄頼朝と不和になる。義経は都を出るが西国落ちに失敗し、吉野に身を隠した後、北国路をとって奥州平泉まで苦難の逃避行を続ける。

『古事記』中巻 ヤマトタケルは西国のクマソを討伐した後、さらに父景行帝から東征を命ぜられる。東国へ向かったヤマトタケルは、相武（＝相模）で火攻めに遭い、走水の海では后を失う。ようやく東征を終えての帰途、伊吹山で氷雨に打たれ、三重の能煩野まで来て、ついに倒れる。

『日光山縁起』 都の殿上人・有宇中將は、鷹狩に熱中して職務を怠り、勅勘をこうむる。中將は都を棄て、馬にまかせて下野国まで行く。その国の長者の娘・朝日の君と結婚するが、六年を経て、都の母のことが気がかりで、中將は単身都へ帰ろうとして、途中で病死する。朝日の君も中將の後を追って旅に出、死ぬ。しかし閻魔王が二人を蘇生させ、二人の間には男児・馬頭御前が生まれる。後に有宇中將は日光の男体権現、朝日の君は女体権現となった。

『源氏物語』の須磨流離の物語は、こうした貴種流離譚の代表的なもの、と考えられている。そしてラーマの物語も、赤ん坊時代に捨てられるのではなく青年期に達してから親もとを離れるという点で、西洋の物語よりも日本の『源氏物語』に近いのである。

ところが先に述べたように、『ラーマヤナ』と『源氏物語』では、異なるところがあった。『ラーマヤナ』では夫婦ともに流離する。王子ラーマは十四年間森に追放されるのだったが、彼は、妻シータ・弟ラクシュマナとともに森で暮らすのである（その

間にシータをさらわれ、彼女を取り戻すべく魔王ラーヴァナの軍と戦う)。そしてこれは『ラーマーヤナ』だけでなく、インドの古代の物語では、他にもしばしば見られる展開なのである。

『マハーバーラタ』 パンドウ家の王子ユディシュティラは、クル家の王子ドゥルヨーダナとの賭博勝負に負ける。その結果、ユディシュティラは四人の弟(ビーマ、アルジュナ、ナクラ、サハデーヴァ)及び彼ら五人の共通の妻ドラウパディーとともに、十二年間、森で放浪生活を送ることになる。十三年目には、誰にも気づかれぬよう正体を隠してどこかに身を潜め、もし気づかれたら、さらに十二年間森で過ごす、との取り決めであった。

これは『マハーバーラタ』の主筋であるが、その中の有名な挿話、ナラ王子の物語でも、夫婦そろって森へ入って行く。

『マハーバーラタ』第3巻「森の巻」 魔王カラは、ナラ王がダマヤンティ姫の婿になったことを憎み、ナラ王の弟プシュカラをそそのかしてナラ王と賽子賭博をさせる。ナラ王は賭に負け、王国も財産も失う。彼は着の身着のままに妃ダマヤンティとともに王宮を出て、森をさまよう。魔王カリがナラ王の心を乱し、ナラ王は「妃は一人になれば、どこかでまた幸せを見いだすかもしれぬ」と思い、眠るダマヤンティを置き去りにする。目覚めたダマヤンティは夫を捜して森を出、叔母にあたる某国の皇太后に保護される。

ただし、森へ入ってからの展開は、三者三様に異なる。『マハーバーラタ』では、妃ドラウパディーは終始五王子とともにあるが、『ラーマーヤナ』では妃シータは魔王ラーヴァナにさらわれてしまう。ナラ王の物語では、ナラ王は、眠るダマヤンティを置き去りにするのであった。

クナーラ太子の場合も古代インドの物語であるから、『マハーバーラタ』や『ラーマーヤナ』と同様に、妃をともなって旅に出るという展開をする。

兄嫁の物語など

ところで、継母の邪恋の物語については、その類縁の物語がいくつか、古くから存在している。

もっとも古く記録に残されたものでは、古代エジプトの『二人兄弟の物語』がある。これは紀元前1000年頃の物語といわれる。人類が持つ最古の物語の一つである。

『二人兄弟の物語』（古代エジプト） アヌブとバタは、同じ母・同じ父から生まれた兄弟だった。兄アヌブには妻があり、弟バタは独身だった。ある日、バタは兄嫁から誘惑されるが、これを退けた。兄嫁は自分の行ないを夫に告げ口されることを恐れ、逆に「バタが私を誘惑した。私が拒否したのでバタは暴力をふるった」と夫アヌブに訴えた。アヌブはこれを信じてバタを追い、バタは逃げた。

これは、継母が継息子を恋するのではなく、兄嫁が夫の弟を恋するのである。
旧約聖書には、夫の部下を恋する女の話がある。

『創世記』第39章 ヨセフは、エジプト人ポティファル（ポテパル）の家に召し使われる。ポティファルの妻が「私と一緒に寝なさい」とヨセフを誘うが、彼は逃げる。妻はポティファルに「奴隷のヨセフが私にいたずらをしようとした」と訴え、ポティファルはヨセフを監獄に入れる。

次のギリシアの物語も同様である。

『ギリシア神話』（アポドロス）第2巻第3章 プロイトスの后ステネボイアがベレロポンテースに恋心を抱き、逢引きしようともちかけて拒絶される。ステネボイアは「ベレロポンテースに誘惑された」と夫プロイトスに告げる（『イリアス』第6歌の類話では、プロイトスの後の名はアンテイア）。

中世の例もある。

『ドイツ伝説集』（グリム）479「無実の騎士」 オットー三世の帝妃が、ある騎士に懸想するが拒絶される。妃は「騎士に辱められそうになった」と帝に訴え、騎士は首を刎ねられる（同・480「寡婦と孤児の訴えを裁くオットー帝」も類話）。

中国には、兄嫁の誘惑の話がある。

『水滸伝』（120回本）第24回 蒸し団子売りの武大は醜い小男で性格もおとなしかったため、妻の潘金蓮は武大を馬鹿にしていた。武大の弟・武松は、兄とは対照的に背丈八尺の偉丈夫だったので、潘金蓮は武松に言い寄る。しかし武松はこれをはねつけて去る。

このように見てくると、兄嫁の誘惑の形が古形であって、そこから継母の邪恋の物語

が派生した、という可能性も考えられるように思われる。

さて、最後に、継母の邪恋とは逆の形、継息子の方が継母に思いを寄せる物語をあげておこう。

『源氏物語』の光源氏は、何人かの継母を持つ身の上であった。先にのべた弘徽殿女御のような敵対関係とは逆に、光源氏が思慕し関係を結んでしまう継母が、藤壺女御である。

『源氏物語』 桐壺帝は、藤壺女御（＝先帝の四の宮）が十六歳の頃、彼女を後宮に入れる。それから数年後に桐壺帝の息子光源氏が、藤壺女御と関係を持ち、光源氏十九歳・藤壺女御二十四歳の年の二月十余日、秘密の子（＝後の冷泉帝）が誕生する。

この物語にもとづいて書かれた近代の小説が谷崎潤一郎『夢の浮橋』である。内容のみならずタイトルも『源氏物語』にもとづいている。

『夢の浮橋』（谷崎潤一郎） 「私（乙訓糺）」は六歳で生母を失った。「私」が九歳の時に父は再婚し、「私」には十二歳年上の継母ができた。「私」は成人後、継母と関係を持つようになった。父は「私」に、「妻をめとり、夫婦で母に仕えよ」と遺言して死んだ。「私」は妻をめとったが、三年後、妻の不注意により、継母は百足に胸を刺され、三十五歳で死んだ。妻が故意に、眠る継母の胸に百足を置いたのかもしれない。

20世紀の兄嫁の物語

なお、兄嫁と義弟の物語は、近代日本にも見られる。兄嫁と夫の弟が一夜をともに過ごす、何事も起こらない、という物語がある。

『行人』（夏目漱石）「兄」 「自分（長野二郎）」の兄一郎は、学識豊かな大学教授で紳士だったが、妻直の心を疑い、「直はお前に惚れてるんじゃないか」と、弟である「自分」に聞く。そして「直の節操を試すため、二人で和歌山へ行って一泊してくれ」と「自分」に頼む。「自分」は、直とともに和歌山の宿に一泊する。暴風雨で停電し真っ暗になった部屋で、直は帯を解き浴衣姿になり化粧をする。そして「これから和歌の浦へ行って、一所に飛びこんでお目かけましょうか」とか、「たいていの男は意気地なしね。いざとなると」など、意味ありげなことを言う。

兄嫁の誘惑ではなく、弟の方から兄嫁に思いを寄せるという物語もでてくる。

『乱れる』（成瀬巳喜男） 昭和三十年代の静岡県清水市。礼子はこの地に嫁いですぐ、

夫を戦争で失った。以来十八年間、礼子は夫の弟妹や姑の世話をしつつ、家業の酒屋を営んできた。亡夫の弟・二十五歳の幸司は、十一歳年上の兄嫁・礼子を思慕し、ある日、愛を告白する。礼子はいたたまれず、家を出て故郷・山形へ帰る。幸司は後を追う、二人は銀山温泉の宿に入る。しかし礼子は幸司の愛を受け入れることができない。幸司は一人で酒を飲みに出かけ、崖から転落死する。

これは1964年に公開された映画である。だからこのような悲劇的な結末になったのであろう。もし21世紀の現代であれば、これとは異なった展開になるのではないかとと思われる。

注

- (1) 引田弘道「クナラ物語（その一）」(愛知学院大学文学部人間文化研究所紀要『人間文化』第21号・2006年9月)、同「クナラ物語（その二）」(愛知学院大学文学部人間文化研究所紀要『人間文化』第22号・2007年9月)にもとづく補注である。
- (2) 以下、本稿に記すさまざまな物語の具体例は、すべてホームページ『物語要素事典』から引いたものである。それぞれの物語の依拠テキストは、『物語要素事典』の作品名索引に記してある。『物語要素事典』のURLは www.agu.ac.jp/~kamiyama/、あるいは www.aichigakuin.ac.jp/~kamiyama/。Yahoo その他のサーチエンジンで「物語要素事典」もしくは「物語要素辞典」と入力しても、検出できる。

〈付記〉 本稿は、引田弘道・神山重彦による共同研究「仏教物語文学の構成要素」の成果の一部である。